岷江入楚

雲蟬

Freer Gallery of Art
Washington, D.C.

空蝉

十六歳　中将

源氏自中川家帰給事

帚木巻之終乃詞と続て出給ふ事侍りし中河よりと
ゆりけるついての事

同六月ニ又伴小君宿中川家事

空蝉君与西御方打碁事　西御方ハ伊与守三女也

源氏君垣間見給事

小君引導源氏君令通空蝉君寝取脱置薄衣遁去事

源氏君人違逢西御方事　西御方号軒端荻是也

源氏取薄衣出給事

老人見源氏誤状将君事

源氏還二條院送哥於空蝉君有返歌事

序録　並一以歌爲名

いつとミの月をよくつくりけるよのなかにかくのなかりしこそあれ

巻並之事

いつれの物語にすこしの並　是は旧き家の才子は立て並ひの中の文篇
の中なるにて又は漢書の物語といひしものにて並一帖ミ業例
義云漢書の並ニハ大底同年の事を同時にならへて書し
義云北物語の並の帖一編に同時のことならへてし横竪の紀
同て次のように作られて有しかは並もみな竪の並と云
色さるや今の序録にもとらしされハ奥入にも此並とあれと
第一の須磨並といひ是にてもあらん一流にハとりて旧の巻此並と
並一篇 本元とときは 二ツ気といへりとこむらさきの並ハ横竪共に漢
書より出たる花実並蓮生ハ一向横の並しるよの物語の
並をも横とらへてより漢書の並をも店て見わかる同時に
なるへし されハ是も横し此並の中に見え 横の義いたくさし奥入
も竪横の義を論ぜられ　中院支書云尚書之篇之竪横此並
ノ義ニ相似也彼序云以舜典合於堯典益稷合於皐陶謨盤康
三篇合爲一康王之誥合於顧命亦也　猶是は此並の心にハ
あらぬ事なれとも並比隣近方并配是亦皆なすらひなるへきの訓
を廣韻云并ハ合也　又詩賦序に并序とあるを菅家流にハ序
とあはせたるよしかけり　此注し自余ハなすらひに序を注之とも
並の心なり　御存知也　並の義なを先横とみなすとかつかつ注
書の物語のことく　但此物語にもさやうに竪のならひあるへ
きしるすへし一巻の中の事ことにことわりて一部をなすへきよし
又一巻の中に横竪を兼てつかふ也　帚木花宴は始ハ若紫同時の
事を書て末ニハ若紫より後の事を書す　空蝉巻も
竪に並て奇を以て名とせり　並の中ののち後の巻ハ竪
の并也　第一本巻のつゝきなり
此並とは前の後に作花宴にこえしあり　并義ニ同し然て
並の事　史記などにしかも列傳と云て月日をならへあはせ
義云　并ハ横竪の河海の事　河海に細々注事なり　源氏竪
の物語の並ハ皆横し同時をならへて書をと横し云各列の年
紀をも竪に云さる也　ひのまへにこそ　横なり

横竪之事　天台本書云義第一云　私謂實相之法横竪凡
夫之中執竪破三聖之證得　箋云横竪ノ説縦之着丸云云
私云史記本紀世家列傳なとゝ次第せる　本紀ハ紀年
相爲紀若帝皇之次第年紀ともて紀をたてゝ　世家ハ諸侯の家を
世々にかたりつたへたる人をしるせり　此物語にも十帖
に紀を八宮の本よりかのまきあるまて紀せり　列傳ハ
一人々々の上を紀をたてゝ紀し　此巻ハ空蝉の品の別
傳しまつりおきて　蓬生まて八常陸宮の前後の年紀の
混乱しなかハさまへのよこ山目のあらましをいひ出すゆへし
空蝉巻ものゝこしめにあかしのかれ給ふのもしと又かはりしたなと云
うくまいりし此物語ハ史記のあたりけを模しあらはと心
ゆへしこゝやしたかにうちこは母ありしこゝろにもなるへし
此箋三光院御説如此し

於ゝさ給ふるゆうに　空蝉ハ第本まきの紙の初につきてかくせり
中川の宿にかたかへりける秋の末なし　私箋本同し
箋云第本まきて帚木山中にて川の中まてハ空蝉の別傳と云へん
あなたりさう八中川の逢のことゝ八法ましくに中まてる一と第本の
まて中につんるかたへ後まて絵り給はさつゝあまりのことりやて此くも
色てこつる紙かいさへゐくりけるへし　云
此中云第本の紙かハ桐壺の末に空蝉と云名にて…と語て空
源氏君のことおきしこしま出もりはるまてもと常に風にて有する同数し
これハ人々にて源氏にてもなしとあとと　是源氏君御文の中
秘　源氏君は御文と自筆し
箋云源氏君のうれつまとなれの自筆に
小君をとゝろしめんとのこゝろんなり
後かさん　小君に
いはらりしゝろして　源の君に家なく
まさりけるへしとや
小君か空蝉かたへ

あはれなるよそへつゝいひ　やるかたなきにまよひてあまりてかこちかねて
いひかけてきく人もなしとやかましくはかなきことを
まことのやうにて　義云小蜘と思ひて見るにもはかなき
ことはりもしらぬ哀れは　纏(ニトフ)字也
とはかりおもふて　小蜘の巣に
せん　かくとなし
なりしかと也　義云蜘てなりぬし善悪の人の事は
ぬす人とかくしてこゝをはなれて穴蜘のとひありかし
たのしてつゝとなりて　秘穴ともいはれぬ事也
義穴蜘の巣はなれて源のことは御音信なりけりとも云はあるへし
とも見ていとおかし　御方違のこともれとも
されと心さへりんとは人知るへくもありてさりし
よるはかゝれてといふもの　皆てあるやうなる　後撰や
なみのよし　時もしらぬかあしさなん生は貞女かてゝもとれと
まかせてもかゝれはせん　時にかとらへし
見もなかりし　穴蜘の巣にかゝりあらはれて居るを見る

是又貞女ははなれかたなるへし　穴蜘はなやとつきなりてし
空蟬こそは源氏の君をしたひぬれ生は知るよしもなく此一段の詞にては
おもひつれよ梢し深き事は二条院の東の院よりのかへりてや
くらし　此巻なるへし
義云此詞を記るしとゝめて中河のやとの方違へは外に空蟬
は宿と空蟬難知とりつらし深し是河内方記し類物語の奥
をりしたつへきて聞へし
秘云かくてもちかきていし　此ものはせられとの後なれはよ
細なれしとおもふにおかしき君は立まさりててかくいひて也
源の穴蜘とを思ひおもふにたより
蟬はむつかしなりしゆへし
小蜘ゆゑにつらうも　又小蜘と源のつらひさまつて
うきも　河　慨哉ウレタヒカナ　慷哉ウレタヒカナ　巳上日本紀
蟬かとものうきにらん　源の乞むしを帰りなかし
れなりけりと　河　将計タハカル　或方使タハカル
うかるとみくるも　よつりしかるかしまつりはさ
とらひて小蜘か知るかへるよし　此事は

紀伊守めしてうけひし
紀の守めにくそうりて
義 注なり おりむしくなり
女とち ととちハ芳し 万葉には思芳とかき夜の心く
正のてちいはまし 万葉に凡の芳とんとそ秋風とそにほうたく
紀云 紀伊守か宿のさ泊し
夕風に凡なかきうしと言なる 万四奥入 ゆつやこハ夜なかきらし
秘義 あ川言ふおもうのとき 此詞くりをとうまし
まくらはゆにて 網代車なるへし その世の板輿の准
紀にて女房の家相なり そさまそし 時ノ字ノ心し 肖遙院自筆本
わくなる
ふハおり字を見られ
これかもあさ礼うかれ 源氏の心の小君のあさ礼給へと云る人の東を
てあやうくおほさすなり
もとさもなりれれハ 源の小君のさらへになりしとはお
ほしなりえをてそくハうのまらしくあかりしいうら礼こし
へくあるこし 御さ伊のうとし 次ノ詞ニ源のつまノ文ノとみこ此詞の

寝殿の指図を思しえらく紙にてらるへし
との井人へたうとゝらふとつまと との井人へ言葉たつとしつらきみと
すれともはやなあさ礼たれハめくらしもてぬるし
月ハ自此 小君の見へけるなり
これらの所ハたうりて 義 秘これらハ女房達小君の人
源氏のさうぬとみつの人へやえしとさんとなり
なそうの所川よう小 小君のとりみへ あしハたうはるるのは
つさしてかせつはかりし ぶちしおふさ礼れかきてなりて
ものより見れ御ところの 花 伊予介女のこと見しまうるそ思人
朱
ふみの書よめりかり 瑞の花といふへし
物のかすとりいみにて 波杯さ由しけいうり彼人への家にかしの
たにあつられうかや 中書にもえとし見え詞し見うう殿に
家ありありかへし 義 云此家中川 の宿ちりかへ 小萩あれし
同中書に宅とある家ハ此中川 の中ようかうし 小わくしまて
紀云 たていいうち源の人れひらうさま外中てハ中川なゝり
前の紀伊守ものくさうりなるしてめとやこなれと

われハなりみやのうちにもへれとことさかしおもしろくふるて
へつらひあへるへきとおもしハ此明石の姫君にて中川の
やとみれしられんにすむへしその秋に源氏のうへよきなく
ふかりしかりのうちさししきなとし明石の姫のさなくに
らひあらせらるまとふかりてみしれこさんといつられたて
蝶なとことしらりまかれにまなかはしらりてころ桂光かくなむ
のこさんとしいつる義ともかられ侍る
碁うちせのうてとりて　河 博物志堯造圍碁 宥朝字奈紀碁此間云五
一曰舜造也　晋中興書云閨碁者堯舜以教愚子也
閨云曰女子に碁の上手出そハ源ふかきさかふかいはまことにさせたりんなあの
源ふ南日くれたらさりて碁なとし桂れ入物をれかりましてき見えて
れてやうのこなとたりしなかをんとのさしへ市様に碁ふかも
うらしさて桂砕のうさこ明石の姫に桂砕の意義し純しくとけよし
さてもひかてらん　源の碁まとらとふそてんてこならにて侍るへし
これいりけるらし　桂子こし

かしこまりてよし　弄 あつしれうちとけたるひとへの
れしつへんなるへし　細 袋同し
ちりもとく　木丁のてひらとも引きてうち隠し
火ちらり　火のかとるしてかの紅梅の出ともと
うらいう隠し　うつとこし
これあやれとくへうさる　河 これ法者の手とれしとそいふて
ちらしいまひとりて　新撰萩 白きうすもの紅へうて
みこあひのことさちにさしてみえたてても彼らにてそれにしらされて
なつしさへ出りたかりとこいつり枕ありやの桂ものへしとく
さらこかんてけとるるハ男にこ源ふ申といふんとてし何何かかう
あつれとおほめしたらり
孟 女房の装束五月八日よりハきとへうさるとさは絵へいかて
とい給りさるうる梅し此時そ字りをてへとれきて出たとへハ
うらにのつかしとれ紫に深うりもし何海にしての夕とれしさりされ
あり　いてやておほえんけり　弄 花鳥に見てしかり
細 花鳥に流飾るへし　紫たつるへし

箋云花やかの詞よし　花ゝしくとにほひやかにとりなしたりの事也
河よりハあかりかなふとて　一ふしえよきふしとさうへし　一節
箋又説は紀しかうけれに花やか河よりといへり
秘　思ひへるを風情をふかく思ふと聞きえたる説をもおかしみかけるらん
えぬなり
箋云唯灯下彷彿而云勝不見分の義正説也
かおもしろきさうしもしひ　秘　定頼朝臣の深き御事也　箋同
もてなやせしかく　これも定頼の御事参とおもてもかハ
なかへさきも絶かうけれぬらん此見よ深からぬさ思し　箋同
いはけなより　秘　此間萩の事をもてなしけれハそれよりおもひつめたる本句
なるかふかり断かをなしけれハとて河をなりけるかへし
やうあいのとうらん
二藍へあかうへる色にいへる用事し
長むねむ二藍にて深きと云　箋同　年かさゝて深き色と云　箋同し
秘云二藍の浅深なるにまさむおなしきもへなうし　深し
かきむおほく色むとよくなくしてそ深きし後かかる色
なるとみえぬかくてなりたきのこさなと　いふ成し

此間萩の衣装なるとりつく
なひしろふにみえたりて
ろう見参にかゝ入ける御しるし云ふ局し　河猶勝し　或抄御説此河の
くれなひのそしきさゆへ見
らしとめととゆくり出へかるもとへかてしとよむへしとこと
こま言小不及見　又河のこうり　岩の事見とこ
箋云河の説よし
さうねくなりけり　河ゝ儀例し　あゝいなりかるへくやう所物
諸云ゆかさへ猶も也し諸の物へされとさやかにかなくは河にて
註　旧説は儀例と云一物ましていつくと思へし物の飽足り二字
あけへこうかやかさやうしくおこうりうあるなからへし　蛭蛉
巻ゝも此詞かうえ会てる箇あへし大かこハ物しつめ
なとうえてもり河海も儀例として　あるハなりかひしとへせう乱
ちかつなり　　舞見花鳥
秘　河にハ儀例とここ　花ゝハ飽足之かさうしくかくとりかなり
紀にも儀例抄よりの儀若無人の衣めかへき見埋不前現也
箋云ふそかれく河にハ儀例あくりれ諸なとここ　花ゝハ飽足に同

たゞしくおほゆるのきはのこと　師説何レ説モ脩飾　侍若
云人の心みて物にあらはれたる侍例何ノ色如此俗上ノ字濁テ讀べし
中書云侍例なるゆへにしらしむる也　とく
おもしろくれたる　何失スルトし　もろくしとしるし
秘せいのもろし　しるりやうれなし　弁同
箋云笑言ともなるなり
まうと　同前なり
さうりハ　何下濁し　勘文紫式部ヵ假名記ニモ此詞アリ
河海抄物語にもつやさうりハとをいつまても物まね也
弁さうりしるさぬしてノ字濁ル　抄又云其の除りて用し也
さうりしるさぬし
箋さうりて何うりしるさぬしとこ　此外ハ何も上濁し
抄云何りてハ下濁し　さうりしる也し　さうりてハ何
りさぬなり其のかはりしも用し　さうりさ濁の義
なりし其の字清てよむへし　也何
秘ちかきゆゑなり　秘　あしきこともなかりしなり

箋中書云秘也まてうるさき也なりけるなり
むくつけおやすれ　何宜　同宜　漢書云諾之濁のなり
よしとてわれおもしつらそしけるかへらる心へ諾ノ字心宜ノ字元
秘いかゞ女のみハ陰のほ物の人まして女の陰のことをいひ出まほし
中にさけれのとられたるとらへなし
人らそれはゆゑ心るのきは言はまと　弁　人の性と教へたるなり
人々さかりハ月まことしかりしよくせぬ人なかりしつかはす
ともまうしたのもまうしいふ言をそへ分けし人の性の教へ
箋中書云ニ第一其の評し
一わたりハ心は
秘一わたりやうふハなれしられ　此様さしたる
中書云一わたりといふ事なハあしくのしるゝ
抄云様子かたのまかへもとむるそこれより何
言にさきなり　何囲　暴緒く　又厨し
秘ことにもとして讀し　しるか別し　厨　何同
箋云厨ハ名あとさるそくて　緒ハうらむなり　中書同し
むかしけに　何心疾なり　むろくやきく

ゆうとけハ　次早速　いそかしく物さはかしき所へ

おしれ人々　次此時源氏君ハいまた紀の守か家より西面

みる人歟すり給へり　母屋の柱のもとにそはめる人へは空蝉也今一人ハ

東へ向ひたるゆゑかなたへ見え給ふ也　経兄の御すかたハかへつて東よりみえ

ますハ母屋の柱のもとに居る方へ向ひたれハ見えぬといへり　御ゆみとなり

らむ人ハ　西の御方ハ奥の方なれハむかひてそ御らんするにて奥の人とハ空

蝉の御かたハ奥に居給ふてやかてかく御らんする端の人へ

むかふ方の氣色也　奥の方へ向ひ給ふ也　一論也となるとも

秘　奥の人ハ空蝉也　空蝉か奥也　次ノ義不審也義同

此云空ハ端の方なれハ君枝の奥の居たる也

そしもむつかしく居給ふ気色也云々

ちゐさく　次ちいさしにてかくしたる也　奇聞

義持ハ体たるにて　新云一説不及義　秘義同し

こゝとこて　次部し

秘　一部二部　一部ノ字ニツゝけたるとかゝり

義云此義けりてわれなるの時よ一川　よのかうなる小地なりへ

打てをひやうしてみるとこゆる碁手のさまにいつへし

此端荻詞　いてとハ語とおなし詞

いくさにハいひそもけなり

義　打くの我のまけしさよりへそ勝とも経

そこハ不知　義云いまたしかりまつしめそこりかくまうれとも

とをひとしてかりとなりてこそよめて　奥へ十二十三十四十

諸君屈指数　白氏文集

いよの湯のゆけたもたとくしからまし　次いよの湯のゆけたハいくついさしらす

かそへすよますや君そしるらん　雑藝歌

いよの湯のゆけたハいくついさしらすかそへすよます君そしるらん

伊予湯　温泉記云―略之　州あまた

湯ふねの名をそるハ湯ち七なり　七十七湯へ

風土記云ゆけた五百卅九也と　京寐流

六花集に古今とて我はかりいよの湯のゆけたハいくつかすハたてたる八

入ての川中ハ十六きへて二十三なりとゝ

雑藝歌にハかそへてよ湯きもとうさつ　又京極流にハ湯桁数

五百卅九といへり　是ハ一説とかや遠ありて皆しるへし　又伊予守行

みつから付ふくへおりし給ひ半作ちとのあるへし
或説ニ伊予国あとのまゝうりはふるり湯中へおりて温泉をそ湯
桁とうしゆるしそともへるおほくあらんこと未し十月毎ニ
神事あり人つくへることみえり斎ありていよの湯の湯桁ハ
いつれもしるく左ハ九つ右八つ中ハ十六やまとにおしとそ
かりあるしらひとへ酒宴ノ時さ湯をへ成りてみえとこと
箋云河花ノ義沿之と謂て杉の荻同篇の様ハ折てへ人の為へ
さ湯へ示て成りしさんへあるとまりありへ伴に此湯の湯桁の数ハ
おしへさしとしれは人へむてし湯出てと 雑藝 歌ニいつまとこれをして
ちんへとあるへし恋へし
そらしられとられたり
さあまてあそてなりつゝ此示たる人のまへ一肝盗題 箋云某此ハさ湯を定 蝶ニ湯さうり
やとのくわりくれあさはらとおもひたるうちに心ありてや 弄 定をし此例し 細同し 箋同し
あるまし一へ出て
めつらしつかしるかれてし
ちつるさ海あうかふら雨へてありしなれは此のつくことかけ給ふ 定 蝶ハへしからへれかへ台お御ひかと

ふりれそこめかへつまなとれし給ふへし
めてうしくられたる 河 同のとに拝するおしく深く初ふ給へとて
とまり一説ニ云睛て花顔高ことれにて此哉あやまれり
弄 くれなりやさし一誰ニ顔高ふくれとしなれはこそのあく
細 睛あうし顔高なりし又そ同成めのうつニ紙るし此篇の飛ことこ
箋云西篇の同めくれなりとを見侍しとこ
くれなるて給ひまて 矢 鼻なうてめく花ぬかや 細同し
箋云漢高祖隆準とて鼻高しとかなり 纏ニモ鼻高脩直
ト云へり 鼻高なりぬへなかとなりし 此所定録ニ皃をくれぬ
人ハ中の書ニ給ひまハ鼻のいさて拝み給ひまハ寝外のふへしを
いひありまハ 弄 定をしへらしぬかうらあかれしを退なとの
をてあつはつし給なし をみへのをし へたり 細同し
りてにやて 箋 承さてあつかうさらとハさうかていへんれと
示しあしへこみ毛色を角しみしあり
はまさんれ侍へうりハ 西御の御方成まし知らるへ示を海さ給ふあらし
弄 見苑 細 ことらハへつとしうりハまさかれ時あり

箋云渡されまいらせし比のおもかけわすれかたきと云心也
形見ハつらく　弄 軒はの荻の事也　後撰ニ女読からうつせみ　秘同し
それにつれても　河 あまりうちとけたる事也　流し　色
箋以為何におたやかなる事也　流し
さはかりに　ことも又ひとりをとゝめて源のおもひかゝりて
さ候かぬ　箋 此弟に弟をたのみし源の心かなしみ御心にかゝりせし
御らんしらてさふらへし　中し　源の心也
そのかみかけりし人々　源氏みえしさまに人も大思ひつゝ給
いふらとのこのみへかりやうからとけめく人をもいはてうせて
志ゆへ事ハかれをかき給ふ比とさ海をかくしゝ流し　箋同し
ひまもなとは　視其私屏 日本紀　垣間見 万葉　同 伊勢物語真名
伊勢物語云その男かいまみてけり　たなかにかいまみせし　まとしまり
此おもとこゝろにてにりと云也此の心見えけり　くゑし
いとおしなから　中書のかいま見のこゝろはまし給ふへし
小君おもうらみられハ　秘 小君か心ちはこなれハ云のさ給へ
ましくのそならふ　箋云されおもかけそのまゝ此家に伊予へし

給ひつるを小君にゝせたまふなり　秘
いとをしけなりとし　秘 小君の心なり
箋云御前にてと小君の心也　此事おもひたまへり
まいなりぬ人めかりて　弄 御めもとにゝ小君か詞なり
いかなるさまのあるてともまさにさはりなからん
さてもいひもや　源の詞也
おもとは　小君か詞なりてことを知てこゝろへし
かれかゝるへりゆかりなくとし　軒はの荻の御かたへわたりてし
さもなひし給へなかに　箋云源の心に小君かゝ　植物か心
さることをとしも酒にまかれ給ふしまつへし
我れもさいへ色なき　小君おもきなりてさやうの所のおかしも
かれハまかりしなりまかてかなしときに源のかたに
ありしてもまかて詞也
ほかかいつくに　弄 こゝろもちの詞也
秘 小君かり　安女のいひて詞也　閑書にかたりて読む伊予介の北の方ニく
こゝろをしりしハ　小君の出入の心なり

ち川より出たり　箋云右寝室よりなるへし
ちつより出たりいとくさくハあまたれとつきて源のとはすへし
此すもいりたるのみそ　前の小君の紀伊守にて源を宿し守婦ふ
いひわくるせめかしとらしとさにはさて守婦の君蓄母子なりけり
云合せん（余）枕にも乱れし北川へ舎りんと小君ハ
みとりたし　秘云此君て小君と今とらさ此かことくなりとし
箋ノ義別義なり
紀の守のいりうこと　引との荻もこふかきなのそて在よ
と源の小君りゅうなたり
いそさいはらん　小君か親しいそそこやう佗のそて紀伊ん　とある
さうし　源の親さやうにありとせ起て小君へ此をきえ
されとも　源の親し　箋云よくいましせし　抱ともおく
色おりものみしされともこらは佗のかりめて月枝て
こうしいつま戸を　河今案日本紀ちうかの御記
ふて花本多うて　紙名の半枝しみ氏といふとも前ふハよし
今案ハ書戸より入たり

此さうしちらふ戸みはハ秘にん風にとと傍
河　風傳くへ入りいくく戸たてうしかたんとこそみなふいひつけのと
箋云　源しく此つかやうふらせて下への源と右川かきんためくとし
半しことひあたく
箋云廂風しめしこよせてくへのの方小さつて源と君ひかれなる　花　廂風ふや次の間ふと任　秘同し
戸てすちの所かりいれんも　戸ののけふとよるならうか蓋し
北あたへゆくへく　東のたさしに寝殿ふへのみすへいてめかて
とうりたちに移しく　箋　小の書云小君の新今あかかしにて居よもへ
大あり紀のうちに　中の書云おかしこてひの云はつるとハ此今はへ
此ちし大将しこへのららら方へ小君のいへてなかしへきと
母ようしいましき間　母君の親ともりの小世代やうれ君ももし
奥の親かやう　あらき出てことを世てふさのとて案あり
いふ小そおこ為し　お風つれし　云ひあの源氏の御か
ひめりに居りありたまり
あさとはけて　箋　中の書云右も川あけてさられて守の家と
間くよむ諸ふなりし　清てよむへし

風よりいり給ひて　都に思ひ出ゐる人もなし　あふにあふ
義云源の君須磨に思ひわひて秋のもの思ひのかなしさ
まされる人へこそやりたまひたり
風のしたり　矢優にかなしく哀さもいまハ　節目
時わたりおほし給ひし詞
義云源の君これ優に物思ひする時の心にかなひてさしり
女をさして　是とも心　此哥源氏の後の哥と能とハ
さへてもみえたる小言也とくなれとも
心とけぬるにいふかひなしあはれ
河君ぬる源の心は是秋を思ひよけまたにいふかひ
身ハなりゆくしも我を後されたりけれハ
河様ならかふみの心にかなひたれハとなにそもとものかたらへし
兼し此哥の心ハ何れ　謙徳公集ニいへく
よのなかさへもあはれなるべき人ハそれてかくのことく
此哥ハ見ぬ人ハ無き時　秘義此哥より
義云源の事を語る言葉ありて之をかくへし

長なれはこれ先を　前の句にて葉よりていつりきた
ぬといひつく侍ておりし詞
春からの流るゝ雲　物への花を
身ふく宇都乃不宮にも此人をとして猶をせてあまり
いまゝしく　義に小宮のとよ
うれへをたのみなり　義にいつもハあれ本有ましハいまあしとよう
義此に思ふて無ととのおやしくもひらく身なとりても
え(?)より花をやさしけるあいらひ小哥に猶也ていつてき此なか
つ源氏りひれ　秘源の此ひへの心さたし　義曰
気よりうけるなる小　秘うつとと
わさ(?)源しくおもしく　うれとしれたし
うらさく
きつりくみたり　打荒しくてし
身をむつくり物し　身つとと　兌よとしれ地の并へそひつうれ
物しるなしたひはかめしりぬ室まつるとハ紀り給ひある　花見まて兌よとしれひと
家の下にかくりくろりあて

みし京まりひとりそ　秘 宮蜻よりハかのくしことゝハ
ふる跡ひたちら式部卿の萩とハおりしてよろこ侍る　箋曰
いさうなれさ宮　萩も式部卿宮にて侍る也
秘 川をしにてうそりくるなり
やうしわれあつりしこさゝく　秘 宮蜻に何とさ給をと侍く
此みまのみなり　箋曰く
左やまうしきれと　源の宮なり
人わらへてまよりて　秘 人わらへのみにハ左右つ侍る也
何やしかて　式部卿の萩の不審なるへきし
かいの人と　本こ此人し宮をと独立してけるも
秘 若かとなるまでとうしこそもわらへなうハ今人わらへの
宮うにして宮輝と思ふてもあかれなかりておこなりなうとし
つれおうしうりつる　秘 春きらし時あへまひしきまる
とはそれりかつうれおかれなり　箋 秘同し
ゝ猿え御宮あさし　秘 第子なし　箋同
箋 此まうしおかりしつるたてなかさなれとし

宮うしめさ先く　萩なり
いしおしさうりいかなうし　萩の宮様さ侍らたうへし
あへのをといまもりれ　あへゝハ猫よりれし
秘 まうしそをとそうめくへのさ宮にハあしれえしなかし
箋云 萩のさ宮云申をとくねうしつもやうさとらしさ宮し
宮とをとそうをしかし　源の御方にハ宮とそつをれて
よろへまをと明くの萩に宮をとしてさうれよりかくいきれ
ようとかつきん方にあつりつ侍ふし宮をとしれとの御に
侍し侍しくうふ一面をおかりし　かれ宮し
箋 源の御身つ川にハ雅やらんのやうかく侍へかれ侍宮蜻
れわかをおかれ西し源しそうせまうて
ようふたつかしれと　宇れ姫たうぬなり
あれつゝきへ　何をとし
ふかしつけ侍りしさ宮と　秘 東し此御方遠よ式部卿の
萩への御なうしやしひたうし侍にも宮をとへのうしうい
とわへきしゝと先くれたとしハことつものなし

世らん人そ　蒙云猶折ふしてこそやうてくらはんへたるか
見れは人のゆたかなるとはなかなか猶へ後し　秘曰
蒙云なかなかゆるゝ人こそいゆるしへ残さし　ゆゑやうてなへん
もとつ萩といふことを侍さへことみしめり世らん人とハ
見ゆるかなることなつ人ふかしてある人こそ能意とさへこさし
られかたらむとてあるへことを年月一代源のいつ
かく猶ふたへまかなるへし
めつし心ハなられ色と　秘　萩のさ夜と源のことゐかめし
秋のうらをまめ　秘　かたゑしうきり都に
あやめふ　秘　らゆゑつらゆて返まゝ結ひねへ
蒙云つられあり春のくこひしく後ようし
人にわりかき事よりも　秘　萩なり
これ人の　秘　源の新猶萩にれのゆふ詞
蒙云源の萩りこもりせのふてと深し
是新はの萩の神に通りてゝらひらかにれのゆふ詞
見なつらひふも　矣　源の秋のたのつと可見たさねへし

蒙云よし実に仰ものなら侍らぬあれふゆゑてくれのゆふなり
みさほつきん人とも　おもやうとなほともふみをゆかさしとはなかれ
さまきてもすら結へられて　これのうらむことゆる詞
なつかしく　秘　歌意て心なつかしきこと人のまかへこそとて
なさと人の心えいつる歌ふてよううめ心え結昔日記ニ云
なつかしきりしてちらけんさらみといへり是をさへ
なつかしき神とといへりや
秘　なつかしきとハ歌意なさとをこうらにつうふかなるへし新と
人のよのつゐのへとらふし
秘　源とうしくれ心え直そしさし
蒙云三義とあふ不行以也つゝふゝつきつあるのかなら
いゝのの人のの奥あなれるに節して　宴検流漢
人のことひ侍らんとの　秘　新その萩の詞なり
うつゝもなつくるに　蒙云萩の心わゆね奥ひてなれ
是て補れ詞就後ゆゑてよくなかなとへし
なへてれへし　秘　源の詞し

此ちいさき人〳〵　　秘 小君か事也

日 童女と云て御前なとにつかへ人と云

童女なり　源の御ともにてなつかしくてねまて萩の露詞也

めしよせてへしあか　興風集云女のきぬをとりて御りて

あふさきそのこゝろとてしそとらへ給はめ後ふうしみりけれなりけり

そへしあかかはそへつりしあかし

秘 空蝉のこゝろねしそへしそへつりしあかるし　箋同し

私云これはよりて空蝉の事をいひて此人をとも空蝉の君と云　箋同

しらぬさう

秘 人のおもてにいひつくしはさあらし

きりしあらといひつゝをちらかみやりて中の行くうちし

いへるところられしもくかく　箋云空蝉の御覧いさよひのなれ人

おとなしくしく　こゝしさなとも気色也

こうりて　箋云 小君の失ひたまへし

秘 小君かいふよしなく源よりいまはしく出あるへく

さわそゆくいぬ　小君のよれそしまゐるへし

よれるふこゝにたまへし　元 さうしりて御しとし云也

私云 矢の数不可寡也　秘 さうしらりてへし　箋同し

うしりく

ゆゑありしてしこゝし

とよ母へく　なさ角へあらし宮あるところちけまし

いかかして　秘 小君かいへし　箋同し

あかかず　くるしきくはかりしくしうるへし　箋同 花同

君よ何しいて　小君の源よりいひて秘しるへし

人のつけの　源とさしよるこそられうかくうしるへし

まことかくなしあなて　源の気色あまりてんくいかへ

秘 此女の中よりしいつく文氏部のおりしなりかれし自何自若

花こハ吹将のおほしとしてなかいくれりめし　箋同し

河 侍者(シモト) 白氏文集　御許(ソモト) 新猿楽記　従悪(ソモト) 遊仙窟　悪ハ注ニ依へし

きく人か源氏の君をあまへいるそしつくろうと又村かしらふ

小備の御房なそをいかなしものかとくまいりあんあやまれりし

女きくつれ女房なりし源氏をとそれてからし小君かおねきと

いひふつまへし御ありとくえつるし女房とハ御房などと云か

まうしいまたいはけなきほとなれとては小君かいまたはかなき程の
おほとのゝうちにはめしよせてなつかしみたまふといへり
箋 河内大徳よりのいたはりなきかたの将の事あるはあかて宿の迄は
みそかにうたてこと 和泉式部か童名を御許丸とてとりたり
さけなりけれはとて 思ひまては思ふこともかなふの詞へなけ
さらてはなけかれけるとかや
れなきさうれしき人の 秘 れなきさうれしとて常に人にかへりてさう
人に民部少輔のおほかためのかし 箋 同し
此詞第子注也
られをかくしおく 河引し御引の心し河内につけさるへし
秘 民部のおほとをつまてくありしてもよし
いまさいま 秘 此民部のおほかたの様いかにふかくとかかく
ましかなるつよくし常に中将人のかへるへし
これはなり 小君の出家たよりも人のかへし
まひしかれと 箋 小君は出家しなまけしおとりへし
からかさら添へまいへ 源氏宮へし
秘 源氏のあまたかくれのかくなり
此ありし 此ありては宮人なり
源を民部のありしとたらくやりいかへし
ありとことゝひは 宮人か源をか少輔にてとたくさうしめて約したるに
え人ふまうしう 悟思しうらくし
いかへきそうして 前 ありけのあるなきさうしてあれかし
いかしゝとひとくいそくれいかかし 秘
いかやのくん 今まさに居なてなるといへし
かうらして 秘 源の此をみよにおはしかしうらうして坐
なし気つらは若労しなる心なり
あれかくれありさめ 秘 若子注也し
おほしうりぬ 御 かうへの車なり
箋 紀を此批判なり
小君御車のうらへ 車は後のかたとよせてよるかた
なんのりなるこそうしのとにふよしにはよりよるたにてありのこと
めてしらしのらこはなるへのくと

をさなけれのしらく　小宰相なとよろひれさ母と源の徳りおはすへし
おさなかりけりと　義　小宰相か事よりのたまふなし
あはれなるかなしさ　義　あはれむかしのおもひしるらむなるへし　秘同
かの人忠ならは　義　いかさまにおもひけむ
いとあはれとも思ひかなしき所　小宰相かもとに(?)なるへし　義同
源の御心中にもおもひしるへし小宰相なとかたり
いとゝ物のみつゝましく源のおもひも(?)いかにしてもおもひしらぬ
秘 源の詞也　義同　哥云いとゝ物のみなしかなしきことをおもひしらぬなり
あはれともみえていへはつくつくと源のことを忍ひつゝも
中書云いとゝしかりけるさまにてかくいへるとなり
と小宰相か心中にあるへしいとあはれなることゝいふ意也
事を源のつらくおもひ給ひて小宰相なとかむつかしくおもひ給ふ
ことにおもひてもあるかしく此義は前の義也
いよゝ心をとりてる　源の君かたは侍と心うくもおもひあつかひ給ふへし
きつることもなくさめられて　秘　されはこの宮の御方におはして
あはれにおもはれて　秘　宗とこれは御心中なり小宰相なとは

あはれとおもひしるらましきさてもし
つきせぬかなしさに　うちとけたるついゐなとして姫宮の見え給ひ
ならはましものをしと小宰相の事をも源のおもふへし
ならし給へるもあはれなり　小宰相ならむ
さしくはへ給へる　さまことのみえたるはいかにぬらしなしてもと
ありしかたみにおもひあつかひ給はぬよなかれなるへし
河 宗とし給へるをみて　いかなるかれのいつもなれなれしきことなれ
河 宗蛉とて　蟺ヒヒスケし　文選云蟬(セミ)蜎(ヤク)とかきり彼のかすむきしもの
故に今にいへり　一説にハかけろふ蟬ともいへり蛉の義也
とかく心得へき也
後 ありとみて手にはとられすみれはまた蟬のむなしきからをいへるなり
蛉のゆくへもしらすきえしと也とうとふに蜻蛉のうせたるゆゑなり
御抄云万葉第一中大兄三山歌ニ虚(ウツ)蟬(セミ)毛(モ)嬬乎相格良思
吉云　ゆくへもしらすきえしかけろふとよみける
義云此哥ハ蟬蜒の心なし　秘云此段河花之両義也
恵義ニ定めて此師説といへとも秘抄し義也万葉の心ハかけろふを

みかはのかはりしき心さセりはた人宰相しつらしてさへなれの
さ海きあらはへなり
婦しこ海りひきいかしく　みしれ御うこたり　小君かかりあるへし
絞人も
こしくかありし人へしく　新端荻にさのし御心のたるな
とみ宮とこ人のひさうしか漢なりし御んくりてへ
人ありきなる　河人者へ
身ありくなくして　身にあれ別るんへし
小君うしらふ　宮とこれうこ人行るるへし
河さまうけしゆくく漢さうりしうくも
秘　うやう車ハきうる得うさうりは人へき方になく漢うかりく小君を
ひあさうれしと思ふ石都そは人へしと空蝉のいさあ秘しもうし
此段いさうかはまあのやうなりうふかきあさ漢しうりしかくし漢き
らりてもとハ空蝉への御心さうしあうしけさひひそ新端荻ふ河ハ
絞ひなりされかうへとらへの御心さうしにそあらは荻への御心さうしと
人の気りてまんかなことしるる後へうしぬ車たうれかハ人の心りん

車やう〳〵　花去不たりといつる也
川そいつふ　小君のやうの車と一乞ハ源氏しく宮ひとく
都てうあこし後へお車そとし　小君とて蝶の秘しもうし
ひそりみきうりふてるしく　此源氏宮て車をふさうる給
つり師宮かの秘し紀のみ小君かたあふこうしうこ家之　秘同
さいうふとりて　川とこれはとうまうあいしらえのけひなり
かうは漢し心ところなりあうしなるいさうすしぬ不う貞女へし
いとあるある御色かなれてきやなとしふてくぬしなうれ
そうしや伊勢花の河ハれ御き在きかうれあるりとへやうるん
もうう山伊勢おれ河ハれさて在志かなれかあるりてへやうるん
此哥ハ後撰ニ伊尹郷下ノ女のもとにさはつかはしてとうにつうりなとてしとえ
こ川りしやいとあの河への前あ外れ
うつくしれうかいる　うつせみの心中
みしれ宮うも　荻なり

まろかくへきなきさまにてたつねし　河古 枕よりあとよりかへりたつねしと云を
なからへきことをきこしめへてよろしくいつそれ
れいよりも紫にそめてよろしきとも
小宰相なりけりありけるに　河 わりなくて萩の花にも此小宰相にて源の
青経(?)し給ひにけるをもし　蛉(?)りとしてもていとしてはさてかれとも(?)こそ
わさわしいはんとしいはみ　萩の宮中へし
されはさなり　秘 第一の條し
さましくもしるかしくてそ源の御蔦(?)経を給ひなかへし
つきたなれへし　秘 うけ川よとこし
河 わさえくみてもわかれ　源のさほとと蜻蛉の源かねとこそ
河 わさしえくれはなれかわさえくれかわぬそわさかれえたれ
ゆかしくいま一二首繊く云ふ不及也
わりしかひり此家ますかけるとありけるに物たて　猶かて
河奥入 ありとみてもとられや世中とをかしなくかけろふのかとこいうん
蜻蛉の宮中姫君此君の心にみえりかけろふのあはれさ源にかきり
てみえなりかともつて貞音の心源してれへきれかけり思ひしを

此御かへりことは　むかし源の宮をとこしゆるまへてまいりてもにし
ねたうかきことそへてつかはしける
さりてなくしかけり
うち川たるに
蜻蛉の羽かよはく源氏ありける世にありてかへるやう　蜻蛉の那
秘 義なし
河 此うた伊勢集にあり　此うた伊勢集の歌也 河海に載せられ侍り
これかきてみえかたくりとき來古今にありし　伴瑞物語にて
とりあへす後のうたにみえし書て万葉の哥あまたしえ源義の妻
よみ人のあはしく又そのうへに奥えよりかたとての川の宮の下
句もあれ人ぞとのかみへありてか后たちとてのうへにうたる母の
ひのおり下して此哥一同し　源妻ののうたりかいくしおもう
相のかみの又侍くのうちさちあましへてうちぬかれ移ありけりしかるを
さてありての花をさしのうたにも文字の外あてられたる又此物語にも
ほとのかくてありうたてつくの哥にも心有皆まことに此御集にも
さらぬもとの例あけくうそくの屯しか
義云 此哥全篇伊勢集にも入て河海に載せなり萬と加へられ
義入義云ハ蜻蛉の名音にハ河の伊勢集の古哥をかく此事

来しられば御むかう紙のうしへ出てつかはし給ふに深くしめり
伊勢はあはれて露にぬれまどひてぬれとりかなたるとは蝉
のゝはあかれて来あてまつるぬれとあはれと定く
されゆへりん人をまと申袖にぬれ申となり
九禅が前書に云伊勢物語にもちのはのこゝろさはされ
ゆへといつる斎の斟なりしとみえり